

# 「言語」を駆使して 多様な社会で生きていく

小澤純子 (高43回)

「ニワトリにコンタクトレンズを入れる方法はいくつかわかりますが、あなたはこれらの中でどの方法がいちばん良いと思いますか」。早口の英語で問いかけた教授の目が私をとらえ、答えをうながした。とっさに私の口から出てきたことは「My name is Junko Ozawa」。そして教室に重い沈黙が……。これが、私が今でも夢でうなされる「英語」での最大の失敗です。

## 仕事の幅を広げるために目指したMBA取得

冒頭の失敗は、MBA（マスター・オブ・ビジネスアドミニストレーション）の授業でのことです。MBAとは、大学院で経営に関するひととおりの知識を学ぶ「経営学修士」。カナダ・モントリオールに本校を置くマギル大学が日本に社会人対象の週末クラスを設けており、本国から派遣された教授による本場の授業を

約交渉を担当した際、自分の英語力不足を痛感したことでした。間違いが許されない米国企業との緊張感あふれる交渉、契約文言の推敲などは、少々「英語が得意」程度のレベルではとても太刀打ちできなかったのです。ちようどこのとき、米国、中国、香港への長期出張で毎月半分以上は海外にいたため、移動時間でMBA受験の準備をし、MBAに合格してからは、米国の大学院の数学科にいた夫の助けも借りて、何とか2年間で無事に卒業することができました。

このMBA時代のクラスメートとは、今でも親交があります。当時50代の企業の社長、40代のキャリア官僚、外資系企業の日本支社長、商社のエリートなどさまざまな背景をもった優秀なプロフェッショナルと共に勉強できたのは大きな財産になりました。ここでは、日本企業でありがちな「女性だから」という扱いは全くなく、垣間見た多様な広い世界に刺激を受けて、MBA卒業と同時に転職しました。

## 外資系企業で待っていたさらに厳しい現実

3社目となったデル・コンピュータは、当時世界一番の売り上げを誇っており、優秀な社員が集結していました。MBAは当然のこと、ハーバードで首席とい



●おざわ・じゅんこ（旧姓・石田）  
飯田市桜町生まれ、丸山町出身。  
上智大学外国語学部ロシア語学科卒業。数社を転職後、現在アメリカン・エクスプレス・インターナショナルのマーケティング部長。趣味はランニング。ピラティスのインストラクターでもある。

受けられることで人気の大学院でした。参加しているのは英語を駆使してビジネスをしている自信満々のエリート日本人たちが半分、残りの半分は日本に赴任している外国人たち。冒頭の会話は「ニワトリが喧嘩をしないようにどう飼育するか」というビジネスケースを議論する授業でのやりとりでした。その当時の私の英語力では教授の質問のヒアリングができず、とっさに出てきたのは自己紹介という、とんでもない失敗を、エリートが集結する授業の初回にしでかしたのです。

そんな私が、なぜMBA取得を目指したのか。それは、海外で働くこともふくめ、多様な社会を見てみたかったからです。大学の外国語学部でロシア語と英語を専攻、それらの言語を活かす仕事を目標しており、さらにMBAを目指すきっかけになったのは、2社目に勤めたベネッセ・コーポレーションで、米国企業との契



2017年4月、MBA時代の教授と卒業生たちと（モントリオールにて）

うような方もいました。そして、厳しきの洗礼を受けてしたのは、入社初日の月曜日。直属の上司に「小澤さん、この会社はね、自分の価値と一緒に働く人たちにすぐにはわかってもらわなくちゃいけないんだよ。1週間の結果出せないと意味ないから」と笑顔で言われたのです。新しくできたポジションでの採用だったため、ゼロから新しい価値を提案しなくてはいけない、それを1週間以内に、という厳しい現実を目の前に突き付けられたのです。MBA時代と同じく冷や汗をかきつつ、膨大なデータを分析して新しい提案を考え、金曜日に上司に提出しました。その結果、「まあいいんじゃない。この調子で頑張って」といわれた日の晩、ビールがとても美味しかったのをよく覚えています。

## 「女性だから」という制約に疑問

なぜ「女性なのに」そんな厳しい思いをして働いているのか、と聞かれたこともあります。仕事を通じて

もっと広い世界を見てみたい、自分の中の可能性を広げてみたいという思いがずっとありました。このように考えるようになったのは、私が3人姉妹の真ん中で育ったことが影響しているかもしれません。両親は愛情深く育ててくれてはいましたが、常に「他の姉妹とどう違う個性を出すか」が自分の中にまずあり、「女性」に生まれはしたものの、「女性だから何をしなくてはならない」という意識はありませんでした。したがって、私の「働くこと」の原点は、「自分らしさを活かす」とことであり、得意分野を活かすにはどうしたらよいかを常に考えて働き続けることは当然だったのです。ただ、誤解のないように申し上げますと、「すべての女性／男性が働くべき」と思っているわけではありません。その人その人が生きていくうえで何を選ぶかは自由です。「女性だから」「男性だから」「何歳だから」などと制約されるのではなく、それぞれの人の多様性を認める社会であってほしいと思っています。

### 多様な社会で働く仕事の軸は「言語」

外資系企業を含めて4社で働いてきた中で私の軸は「言語」でした。1社目の通信社ではロシア語を活かして新聞記者、2社目のベネッセでは米国・中国企業と言っているか理解できるから」といわれますが、ロシア語も主語がなくても通じます。それは文法が非常に厳密なためで、動詞の格変化で誰が主語かがわかる形になっています。文法が厳密な理由は明確に聞いたことはありませんが、特徴的な方言がロシアに存在しない理由と同じで、あれだけ大きな国で誤解がないコミュニケーションをとるために、厳密な文法を持った言語にする必要があったのかもしれない。これも「言語」が国の背景を説明していて、とても興味深いと思っています。

### ピラティスでも「みんな違う」を実感する

仕事以外で熱中しているのは「ピラティス」というエクササイズです。ネバダ州立大学の発行する資格を取得し、インストラクターとして杉並区スポーツ財団および現勤務先の2か所で8年以上教えています。年齢も運動経験も違うさまざまな人たちをわかりやすく指導するには、やはり「言語」が大切です。心に響くように伝わる「ことば」で教えることを心がけています。ちなみに、ピラティスはヨガ同様「女性の美容体操」のようなイメージがありますが、実際はイチローなどのスポーツ選手が採用していたり、美智子皇后が取り

業との契約交渉、3社目のデルではダイレクト・メールによるマーケティング、そして現在のアメリカン・エキスプレス・インターナショナルでは、チームを率いて企業との契約交渉およびマーケティングを担当しています。

マーケティングとは、まさに「言語」を駆使してモノを売る仕組みを作る仕事です。例えば、賞味期限が短い食品を売る場合には、「賞味期限は1週間です」ではなく、「産地直送で新鮮なので、1週間以内の美味しいうちに食べるのがお勧め!」というような言い換えをして消費者の購買意欲をそそる、いわば「ものは言いよう」の仕事です。ここでも「言語」を使いわけることが楽しんでいます。

なぜ「言語」だったか。それは、まさに「ものはいよう」のマーケティングであり、単語の選び方ひとつで成功する交渉もあり、部下のやる気をあげることもできる。また、冒頭での失敗のように、会話で自分への評価が決まってしまうこともある、というおもしろさに惹かれていたためです。さらには英語やロシア語という「言語」を使うことで、違う価値観を学ぶことができるからです。例えば、「日本語に主語がなくても文章が成立するのは、コンテキスト(＝背景)で誰

組まれている「筋トレ」です。第一次大戦中に怪我をした兵士向けに開発されたりハビリが原点です。

人それぞれ価値観が違うように、身体も人それぞれ違っていて興味深いことを、毎回のレッスンで再発見します。筋肉のつき方にその人の仕事の癖が出ていたり、



国際色豊かなピラティスのインストラクター仲間たちと (中央が筆者)

同じ「ことば」を伝えても、過去の経験によって理解のされ方が違ったり。「みんな違う」人たちに対して「ことば」をどううまく使って伝えていくか、常日頃から学ばせてもらっています。

「言語」は言いよう、使いやすい。この自由な道具を存分に駆使して、公私ともに多様な社会を楽しんでいきたいと思っています。